

添付資料3

出典：フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』

種田 山頭火

(たねだ さんとうか、本名：種田 正一 (たねだ しょういち) 1882年 (明治15年) 12月3日 - 1940年 (昭和15年) 10月11日) は、日本の自由律俳句の俳人。山頭火とだけ呼ばれることが多い山口県佐波郡 (現在の防府市) 生まれ。『層雲』の荻原井泉水門下。1925年に熊本市の曹洞宗報恩寺で出家得度して耕畝 (こうほ) と改名。各地を放浪しながら1万2000余りの句を詠んだ[1]。

「行乞日記」昭和5 (1930) 年

十月十日 曇、福島町行乞、行程四里、志布志町、鹿児島屋

八時過ぎてから中町行乞二時間、それから今町行乞三時間、もう二時近くなつたので志布志へ急ぐ、三里を二時間あまりで歩いた、それは外でもない、局留の郵便物を受取るためである、友はなつかしい、友のたよりはなつかしい。

旅の子供は夕べしく／＼泣いてゐる

旅はおかしい朝から夫婦喧嘩だ

- ・親によう似た仔馬かあいやついてゆく

みんな寝てしまつてよい月夜かな

- ・月夜の豚がうめきつゞけてゐる

月光あまねくほしいまゝなる虫の夜だ

月の水をくみあげて飲み足つた

明月の戸をかたくとぎして

故郷の人とはなしたのも夢か

伸ばした足に触れた隣りは四国の人

秋の白壁を高う／＼塗りあげる

松葉ちりしいてゐますお休みなさい

- ・松風ふいて墓ばかり

踏むまいとしたその蟹は片輪だ

志布志へ一里の秋の風ふく

- ・こゝまできてこの木にもたれる

- ・秋風の石を拾ふ

- ・人里ちかい松風の道となる

泣く子叱つてる夕やみ



飲まずには通れない水がしたゝる

砂がぼこ／＼旅はさみしい

ヨタ一句

こんなところにこんなシヤンがある波音

安宿の朝はおもしろい、みんなそれ／＼めい／＼の姿をして出てゆく、保護色といふやうなことを考へざるをえない、片輪は片輪のやうに、狡いものは狡いやうに、そして、一は一のやうに！

今日の行乞相はよくもわるくもなかつた、嫌な事が四つあつた、同時にうれしい事が四つあつた、憾むらくは私自身が空の空になれない事だ、嫌も好きもあるものか。米価の安くなる事実は私のやうなものをも考へさせる、——飢肥では貳十八錢、油津では二十五錢、上ノ町では貳十貳錢となつた（新白米では貳十錢以下だとさへ聞いた）。

今町から志布志まで三里強、日本風の海岸佳景である、一里ばかり来たところに、宮崎と鹿児島との県界石標が立つてゐる、大きなタブの樹も立つてゐる、石よりも樹により多く心を惹かれるのは私のセンチメンタリズムか、夏井の浜といふところは海水浴場としてよいらしかつた、別荘風の料理屋もあつた、浅酌低唱味を思ひ出させるに十分だ。

自動車走、箱馬車が通る、私が歩く。

途上、道のりを訊ねたり、此地方の事情を教へてくれた娘さんはいゝ女性だつた、禅宗——しかも曹洞宗——の寺の秘蔵子と知つて、一層うれしかつた、彼女にまことの愛人あれ。

草鞋がないのには困つたが、それでもおせつたいとしていたゞいたり、明月に供へるのを貰つたりして、どうやらかうやらあまり草履をべた／＼ふまないですんだ、私も草鞋の句はだいぶ作つたが、ほんたうの草鞋の名句が出来さうなものだ。

同室三人、松葉エツキス売の若い鮮人は好きだつたが、もう一人は要領を得ない『山芋掘』で、うるさいから、街へ出て飲む、そしてイモシヨウチュウの功德でぐつすり寝ることが出来た。

十月十一日 晴、曇、志布志町行乞、宿は同前。

九時から十一時まで行乞、こんなに早う止めるつもりではなかつたけれど、巡查にやかましくいはれたので、裏町へ出て、駅で新聞を読んで戻つて来たのである（だ

マ、
いたい鹿児島県は行乞、押売、すべての見師の行動について法文通りの取締をするさうだ）。

今日は中学校の運動会、何しろ物見高い田舎町の事だから、爺さん婆さんまで出かけるらしい、それも無理はない、いや、よいことだと思ふ。

隣室の按摩兼遍路さんは興味をそゝる人物だつた、研屋さんも面白い人物だつた、

秋寒く酔へない酒を飲んでゐる
今日のうれしさは草鞋のよさは
一きれの雲もない空のさびしさまさる
波のかゞやかさも秋となつた
砂掘れば砂のほろ／＼

線路へこぼるゝ萩の花かな

秋晴れて柩を送る四五人に

- ・ 岩が岩に薊咲かせてゐる（鶺鴒）
- ・ 何といふ草か知らないつゝまじう咲いて
まづ水を飲みそれからお経を
- ・ 言葉が解らないとなりになる
秋晴れの菜葉服を出し褪めてゐる
- ・ こころしづまゝ山のおきふし
- ・ 家を持たない秋がふかうなつた
- ・ 捨てゝある扇子をひらけば不二の山
旅の夫婦が仲よく今日の話
行乞即事

秋の空高く巡査に叱られた

- ・ その一銭はその児に与へる

今夜は飲み過ぎ歩き過ぎた、誰だか洋服を着た若い人が宿まで送つてくれた、彼に幸福あれ。

藪焼酎の臭気はなか／＼とれないが、その臭気をとると、同時に辛味もなくなるさうな、臭ければこそ酔ふのだらうよ。

世を捨てゝ山に入るとも味噌醤油酒の通ひ路なくてかなはじ、といふ狂歌(?)を読んだ、山に入つても、雲のかなたにも浮世があるといふ意味の短歌を読んだこともある、こゝも山里塵多しと語まゝ句も覚えてゐる、田の草をとればそのまゝ肥料コヤシかな——煩惱即菩提、生死去来真実人、さてもおもしろい人生人生。

夕方また気分が憂鬱になり、感傷的にさへなつた、そこで飛び出して飲み歩いたのだが、コーヒー一杯、ビール一本、鮭一皿、蕎麦一碗、朝日一袋、一切合財で一円四十銭、これで懐はまた秋風落寞、さつぱりしすぎたかな。

山頭火の作品 (抜粋)

- ・ あるけばかつこういそげばかつこう
- ・ へうへうとして水を味ふ
- ・ 一羽来て啼かない鳥である

昨夜の「山芋掘り」も亦異彩ある人物だつた、彼は女房に捨てられたり、女房を捨てたり、女に誑されたり、女を誑したりして、それが彼の存在の全部らしかつた、いはゞ彼は愚人で、そして喰へない男なのだ、多少の変質性と色情狂質とを持つてゐた。

畑のまんなかに、どうしたのか、コスモスがいたづらに咲いてゐる、赤いの、白いの、弱々しく美しく眺められる。

今日はまた、代筆デーだつた。あんまさんにハガキ弐枚、とぎやさんに四枚、やま

いもほりさんに六枚書いてあげた、代筆^{マ、}をくれやうとした人もあるし、あまり礼もいはない人もある。

夕べ、一杯機嫌で海辺を散歩する、やつぱり寂しい、寂しいのが本当だらう。

行乞してゐる私に向つて、若い巡査曰く、托鉢なら托鉢のやうに正々堂々とやりたまへ、私は思ふ、これですゐぶん正々堂々と行乞してゐるのだが。

隣室に行商の支那人五人組が来たので、相客二人増しとなる、どれもこれもアル中毒者だ（私もその一人であることに間違ひない）、朝から飲んでゐる（飲むといへばこの地方では蕎麦焼酎の外の何物でもない）、彼等は彼等にふさはしい人生観を持つてゐる、体験の宗教とでもいほうか。

コロリ往生——脳溢血乃至心臓麻痺でくたばる事だ——のありがたさ、望ましさを語つたり語られたりする。

人間といふものは、話したがる動物だが、例の山芋掘りさんの如きは、あまり多く話す、ナフ売りさんはあまりに少く話す、さて私はどちらだつたかな。

酒壺洞君の厚意で、寝つかれない一夜がさほど苦しくなかつた、文芸春秋はかういふ場合の読物としてよろしい。

支那人——日本へ来て行商してゐる——は決して飲まない、煙草を吸ふことも少い、朝鮮人はよく飲みよく吸ひ、そしてよく喧嘩する（日本人によく似てゐる）、両者を通じて困るのは、彼等の会話が高調子で喧騒で、傍若無人なことだ。

夢に、アメリカへ渡つて、ドーミグラスといふ町で、知つたやうな知らないやうな人に会つて一問題をひきおこした、はて面妖な。

十月十二日 晴、岩川及末吉町行乞、都城、江夏屋（四〇・中）

九時の汽車に乗る、途中下車して、岩川で二時間、末吉で一時間行乞、今日はまた食ひ込みである。

- ・年とれば故郷こひしいつく／＼ぼうし
安宿のコスモスにして赤く白く
一本一銭食べきれない大根である
- ・何とたくさん墓がある墓がある
海は果てなく島が一つ
- ・はだかでだまつて何掘つてるか

- うしろすがたのしぐれてゆくか
- どうしようもない私が歩いている
- 生まれた家はあとかたもないほうたる
- 音はしぐれか
- ゆうぜんとしてほろ酔へば雑草そよぐ
- 酔うてこほろぎと寝ていたよ
- 鴉啼いてわたしも一人
- 笠にとんぼをとまらせてあるく
- 笠も漏り出したか
- けふもいちにち風を歩いてきた
- この旅、果もない旅のつくつくぼうし
- こころすなほに御飯がふいた
- しずけさは死ぬるばかりの水ながれて
- 鈴をふりふりお四国の土になるべく
- 霧島は霧にかくれて赤とんぼ
- 母ようどんをそなへてわたくしもいただきます
- 貧しう住んでこれだけの菊を咲かせている
- また一枚脱ぎ捨てる旅から旅
- まつすぐな道でさみしい
- ふるさとはあの山なみの雪のかがやく
- すべつてころんで山がひつそり
- また見ることもない山が遠ざかる
- 松はみな枝垂れて南無観是音
- ぬいてもぬいても草の執着を抜く
- 分け入つても分け入つても青い山
- 鉄鉢の中へも霞
- 山へ空へ摩訶般若波羅密多心經
- 水音の絶えずして御仏とあり
- てふてふひらひらいらかをこえた
- ほろほろほろびゆくわたくしの秋
- 生死の中の雪ふりしきる
- おちついて死ねそうな草萌ゆる
- 濁れる水の流れつつ澄む

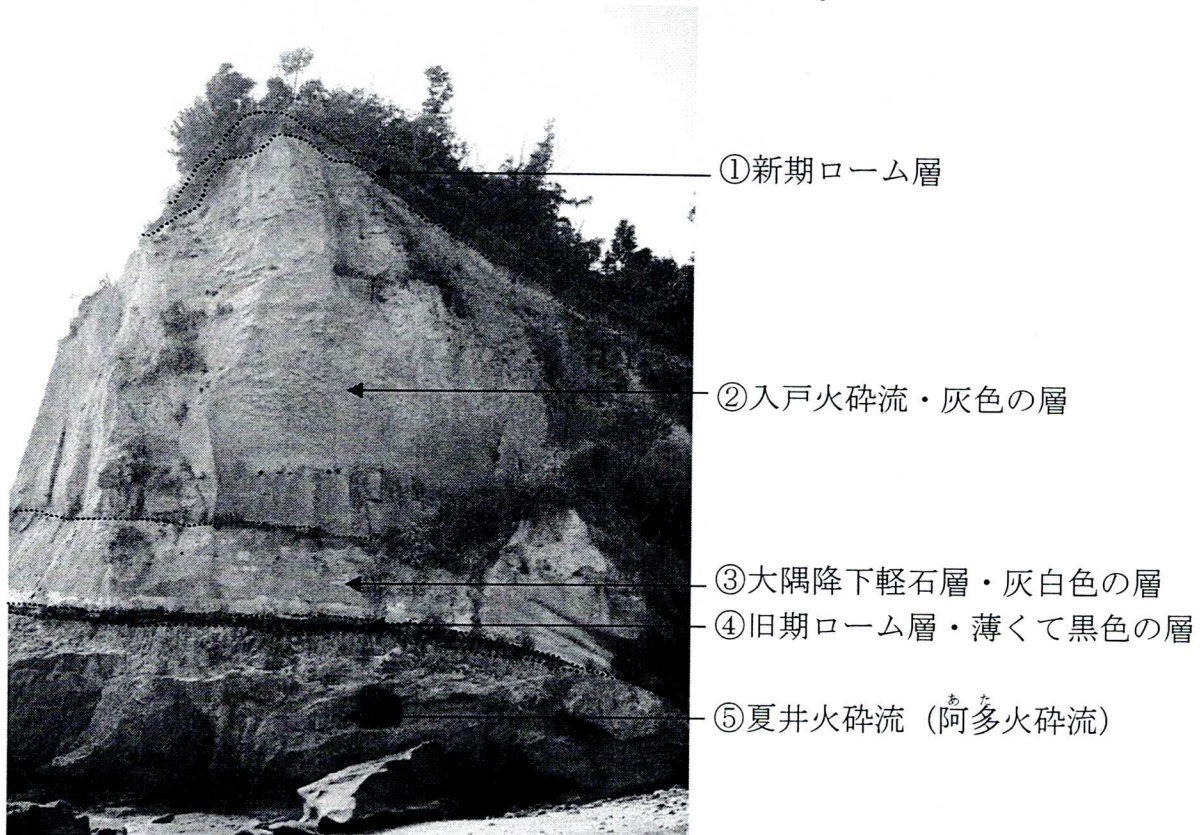
添付資料4

国指定文化財 志布志市夏井海岸の火砕流堆積物

志布志市夏井海岸の火砕流堆積物は、志布志湾奥部で、鹿児島・宮崎県境に近い夏井漁港から志布志港までの海岸線約2 kmのうち、約1 kmの海岸部分です。

「鬼の洗濯岩」で有名な日南層群が基盤岩石となっていて、その上に複数の火砕流（火山の噴火による噴出物）が堆積した様子が、海食の影響で明瞭に確認できます。

この景観はとても珍しく、地質学上、非常に貴重です。



- ① 複数の火山灰や腐植土が堆積してできた地層
- ② 約2.9万年前の始良カルデラの噴火による噴出物
- ③ 始良カルデラの噴火に先立って大量に噴出した軽石が堆積してできた地層
- ④ 約2.9～10.5万年前の間に、複数の火山灰や腐植土が堆積してできた地層
- ⑤ 約10.5万年前の阿多北部カルデラの噴火による噴出物

また、一部の場所では、^{あたとりはま}阿多鳥浜火砕流（約24万年前の阿多南部カルデラの噴火による噴出物）も確認することができます。

噴火による堆積物は、熱と重量で圧縮され、^{ようけつぎょうかいがん}「溶結凝灰岩」と呼ばれる岩石になります。溶結凝灰岩は加工しやすいため、志布志では貴重な石材として古くから建築などに利用されていました。



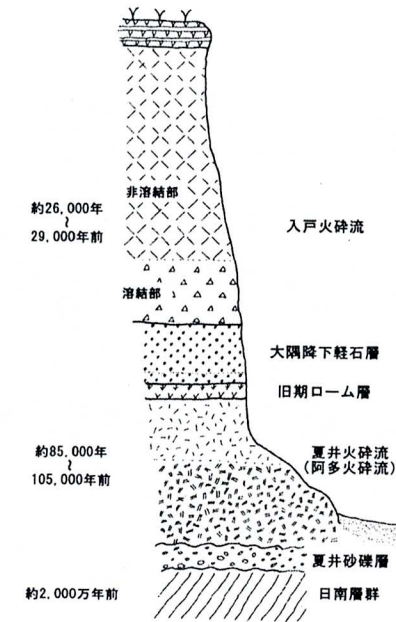
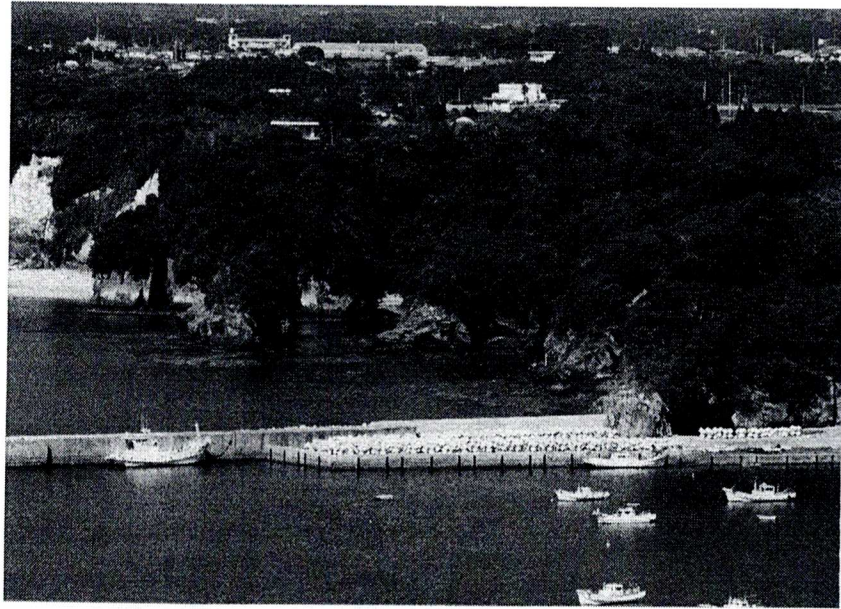
国 指 定
天 然 記 念 物

し ぶ し な つ い か さ い り ゆ う た い せ き ぶ つ
志 布 志 市 夏 井 海 岸 の 火 碎 流 堆 積 物

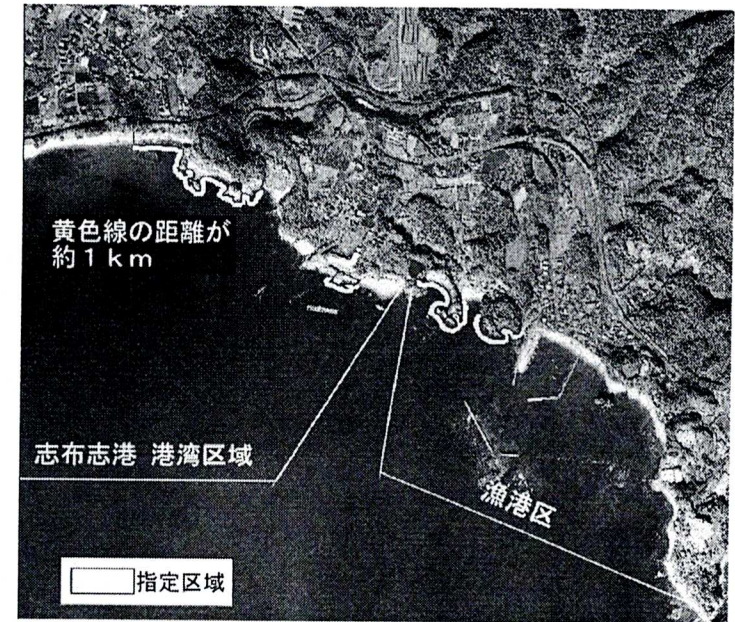
指定日 平成 24 年 9 月 19 日
所在地 志布志町大字夏井帖地内
管理者 個人管理

太平洋に面した志布志湾の奥に位置する夏井海岸は、鹿児島県・宮崎県境にあり、50m程の垂直に近い崖が、永年の侵食によって削られ小島や岬状になり、小規模なりア斯的景観となっています。

夏井海岸は、日南海岸にある「鬼の洗濯岩」で有名な日南層群が基礎岩石となっていて、その上に複数の火砕流（入戸火砕流・夏井（阿多）火砕流・阿多鳥浜火砕流）が堆積した様子が明瞭に確認できることから、地質学上特に貴重であると評価されて、この海岸の夏井漁港から志布志港までの海岸線約2kmの内、自然の海岸が残っている1kmの範囲を国の天然記念物として平成24年9月19日に指定を受けました。



夏井海岸の火砕流 堆積状況図



志布志市夏井海岸の火砕流堆積物 指定範囲

※火砕流とは

火山が規模の大きい噴火をした時に、火口より噴出した高温の火山ガスや土や砂等の粒の混ざった空気より重い流動物のことで、噴火をした直後の火砕流は、地形に沿ってものすごい速さで流れ下り、大地を覆います。